

『日本仏教の社会倫理—「正法」理念から考える』

島蘭進著、岩波書店、2013年

おやさと研究所教授
金子 昭 Akira Kaneko

本書の元になった内容は、月刊『寺門興隆』(興山舎)連載の「日本仏教実践思想論」という論考である。この雑誌名には、現代日本社会に寺院仏教を再度興隆させたいという編集部の思いが込められている。著者の島蘭氏も、そうした思いに応えるような形で、仏教が本来有していた社会参画の契機をゴータマ・ブッダの思想から読み解き、ブッダにおけるサンガ(僧伽)・国家・正法の三者連関が日本仏教にも連綿として受け継がれている有様に注目して、それを仏教の社会倫理という文脈で巧みに整理し、独自の現代社会実践仏教論を提示している。

副題にある「正法」理念とは、単に「正しい真理」の教えの局面だけでなく、法の「具現体」の諸相が含まれるという。仏教において、「正しい真理(の具現体)」としての正法は、サンガ(僧伽)が社会の精神的価値を保証する者となることを願う信仰のあり方と結び付いている。出家して戒律を守り悟りを求めるサンガの生き方は、自らの解脱を目指すだけではなく、社会に不殺生や節制や平安を望む精神を行き渡らせようとする社会倫理的含意をも持つ。

この正法のあり方は、国家・社会や時代状況の変転とともに多様な姿を取るものだ。民衆のための仏教という契機が強くなれば、戒律遵守が重きを持たなくなり、そこに大乘仏教、ひいては在家仏教・在家主義仏教への展開が見られる。現在では正法の具体化はより多様な姿で現れうる。真理は不変だが、真理の具現はさまざまな形態を取るのである。

本書は仏教を題材に取り上げているが、「宗教(教団・者)とは何(者)なのか?」、「宗教者はいかに現代社会に関われればよいのか?」という問題意識を持つすべての宗教関係者にとって、自らの来し方や現状を反省し、今後の活路を見出すためのヒントに満ちている。

例えば、島蘭氏は、伝統仏教教団と仏教系新宗教教団の共通点に注意をはらう必要があると指摘する。現在、いわゆる新宗教と伝統仏教は、一方は主に生者の救済に関わり、他方は主に死者儀礼を担当するというように、相互に役割分担している感があるが、それはどちらも「既成宗教」としてその分限に甘んじてしまっている結果にほかならない。

島蘭氏によれば、仏教ははじめから社会参加仏教であったという。創立時には仏教もまた新興の宗教であった。新宗教が既存の国家体制、社会の仕組みに適合して発展していくためには、社会への強い関与が必要になってくる。仏教の社会倫理の基礎は、帝国・統一国家的な秩序との関わりの中に見出され、そこからこの問題を再考するべきだと、島蘭氏は主張する。社会への積極的な関与という点では、伝統仏教といえども、実は仏教系新宗教の社会倫理の成立とも重なる契機を有しているのである。

第VI章「在家主義仏教と社会性の自覚」では、日本古来の正法理念にもとづく社会参加や社会実践の現代的形態を、仏教系新宗教がそれぞれに展開させている有様を明快に提示している。正法の具現化を軸とした日本仏教史への着眼は、まさに宗教学者・島蘭氏ならではの独自の包括的スケールのものである。

終章「東日本大震災と仏教の力」では、現在進行形の仏教者

の活躍ぶりが活写されている。ただ、これまでの論述の流れから言えば、現代日本の社会参加仏教としてそれを見たとき、正法の具現化の様相がいささか従来型のような印象を与えるところだ。なぜなら、ここに登場しているのは僧侶ばかりだからである。在家信仰者の姿がどうも見えてこないのが気になる。僧侶たちが避難所や仮設住宅に赴くこともある

が、主な活動の場は寺院である。その寺院もまた、経済的基盤の確立した規模の大きな寺院である。

もちろん、これが間違いだというつもりは毛頭ない。しかし、在家主義を新たな正法理念として徹底するならば、聖俗・僧俗の区別を超えてすべての仏教者・宗教者がだれもが持つ内なる宗教心を「たすけ心」として発露させて、社会参加や社会実践に関わる姿を取るべきではないだろうか。

そうしないと、東日本大震災を機に仏教(宗教)が見直されたといっても、それは地域社会の伝統を担う存在としての社会的インフラとしての寺院や、カリスマ的吸引力を持った一部の僧侶が見直されただけのことであり、決して仏教(宗教)全体の底上げには貢献できないのではないかと思う。

島蘭氏も、すべての人々の「仏性」を引き出すところに本来の在家主義があると示唆している。この考えを一步進めれば、在家信仰者の真価を発揮して、仏教ものびのびとフットワーク軽く社会参加、社会実践も可能になってくる道を開けるようにも思われる。実際のところ、その道は仏教系新宗教団がある程度開拓しているものであるが。

ここでは、主に社会参加・社会活動という側面を中心に紹介したが、本書はそれ以外にも、近代主義的な宗教観と手を携えた鎌倉仏教優越史観への批判など、興味深い論点がいろいろと見られる。本書は、先学の業績を批判的に継承しつつも、独自の論点を随所に盛り込み、日本仏教史を再構築しようとする島蘭氏の意気込みが伝わってくる好著である。

本書の構成は次の通りである。

- 序章 日本仏教を捉え返す
- 第I章 出家と在家—近代的な仏教理解を超えて
- 第II章 仏教と国家—正法を具現する社会
- 第III章 正法と慈悲—仏教倫理の基礎概念
- 第IV章 正法と末法—日本仏教の形成
- 第V章 正法復興運動の系譜—中世から近世へ
- 第VI章 在家主義仏教と社会性の自覚—近代から現代へ
- 終章 東日本大震災と仏教の力

